◇人間の歴史はカクカクであるというのならばいい。が、カクカクであらねばならぬと説く人間の歴史の製造者達の言葉を信じない。
◇アッフランシにもし理想があるとすれば、自己を最大限度に高め、賢明な節度を知った享楽者となり、無偏見なエゴイストとして自己を愛し、その愛が、全人類に通ずることに確信を持つことである。
◇我々は戦争や闘争を人間の本能として結論したくないと同時に、また平和をもひとつの真理として盲信しない。ただ我々が騙されないのは、戦争を倫理化して煽動する政府や、軍閥や、資本家たちの感傷的言語や、彼らの打算でしかない笛や太鼓による誘惑である。
◇アッフランシは偉大であらんがためにひとつの理想を追うローマンチストでもなく、現実を感傷的に否定する厭人家でもなく、ただひたすらに生きんがために多角に人生を味索し、享楽するリアリストである。
◇アッフランシは行動と変化を好み、つねに新しい緊張感を持って生きる。アッフランシにとってはその日、その日が生誕日であり、停滞と倦怠と固定を敵とする。

（「自由クラブ」一九四九年五月）

●この後なお松尾サロンが、〝個の会〟の名称をもって継続する。私も個の会に属して、投稿し、集会の折りには富山から上京した。会はしばしば兄弟関係にある添田知道さんらの「素面の会」と合同の集会の場をもち、賑やかなことであった。（玉）

では、おれの実践方策を授けよう――

＊太田典礼・森　敦　＊富士正晴　＊卜部哲次郎・辻　潤
＊武者小路実篤

「太田典礼 × 森　敦 ――安楽死のススメ」

森　ぜひ太田さんを紹介してくれという人が多いんですよ。それはなんでかといったら、おれはがんばるだけがんばったんだから、なんとかして死ぬときぐらいは楽に死なせてもらいたいので……。ところが、まだ安楽死させてあげることはできないわけなんでしょう。

太田　いや、ところがね、できるんですよ。やり方によっては。

森　できるんですか。ぼくもお願いしたいなあ。

太田　まあ、まだ本論に入らん。（笑）アメリカでやってるでしょう。遺言書みたいなもの。遺言書というのは死んでから有効になる。しかしこれは生きてるときにね。だから、〝リビング・ウィル〟というんで、ウィルとは遺言とも訳されるし、〝生者の意思〟というふうに統一しようということにしたんですが、そいつを預かるわけですよ。

森　ぼくの遺言を預かってれば。

●太田典礼（おおた・てんれい　一九〇〇～八五）
産婦人科医。京都府野田川町生まれ。避妊具「太田リング」の考案者で、〝IUD（子宮内挿入式避妊具）のファーザー〟と呼ばれる。日本尊厳死協会理事長。
代々続いた産科医の家に生まれ、三高を経て九大医学部卒、京大大学院に進み産婦人科を専攻。子宮内避妊具を考案したが、製造販売が禁止された。産児制限、無産者診療運動などに力を入れ、治安維持法で二回検挙され、通算四年間獄中生活を送る。一九四七年社会党代議士となり、優生保護法の制定に尽力。
一九七六年、過剰医療を拒否する日本安楽死協会（後日本尊厳死協会と

太田　うん、そうそう。それで、その中にはちゃんと書類規定も書いてある。もし私が非常に治らないで苦しむ病気のときには、副作用はいといませんから、苦痛軽減の最善の努力をしてもらいたい。

森　それならもう堂々たるものだ。

太田　これ、治療だよ。治療としてね。

今度は植物人間が問題になってる。意識がないような場合に、回復の見込みがないときは、点滴注射とか、そういう単なる延命処置はお断りする。これが医辞連でいってることなんです。苦痛軽減のことじゃない。積極的な安楽死の場合は、いまいった治療をやる。だから、これはなにも安楽死を目ざしてるんじゃなくて、苦痛を軽減する。その結果として、副作用のために早く死んでもこれはいといません、と書いてある。そして、こいつを預かる。そのコピーを本人と家族に二通送る、お預かりしました、という証拠に。

森　そうすると、もう青天白日ですね。

太田　そういう場合は、本人が意識があるときには本人が出すし、ない場合は家族がその主治医に見せて、その主治医がそれを理解してくれなかった場合には、その主治医の名前とところを知らせてくれ。会として責任を持って、改めてお願いにあがりましょう。現にぼくはやってるんですよ、それを。

森　ほほウ、太田さん自身はやっておられるんですか。

太田　ご自分？　ご自分は、死なないです。わたしは。（笑）

森　不老長寿。

太田　長寿する気はないです、もう。老人医療無料はだめだと。年寄ったら死ぬに決まっ

改名）を設立、理事長となり、同年、安楽死国際会議を開く。

●森　敦（もり・あつし　一九一二〜八九）
放浪のうちに作家となる。仏教的思索をおこない、「月山」で芥川賞受賞。

「IUDにはいろんな種類がある。が、この丸い、歯車状のものは純国産品だ。発明者も製作者も日本人。その名をとって通称〝太田リング〟という。ついせんだって、すなわち七月二十九日、厚生省の中央薬事審議会でようやく、この太田リングが正式の医薬品として承認された」

「博士がこのリングを発表したのが一九三二年。以来四二年間、太田リ

とるんだから、病気したときはチャンスだと思ってね。もう医者にかかるな、薬は飲むなと、私はこういっとる。（笑）

森　話がちょっと飛びますけれども、荒畑寒村さんに会ったんですわ。そうしたら、荒畑さんが――あの人は徹底してる、こういったですよ。「この年になって、ガス管くわえるわけにもいかんし」と。フランスの、ぼくは名前忘れたですけれども、非常に偉い社会主義者がある。それが実は病気じゃなかったんだと。だけれども、自分の役割はすべて終わったと。ということは、人生の終わりだと思ったんだと。だから、ちゃんとりっぱに彼は自分で死んでしまったんだと。

太田　プラトンなんかもはっきりいってる、自殺はいいと。自殺はいけないというのは、中世のキリスト教ですよ。ギリシャの昔にはない。

森　ギリシャ神話によれば、死のうと思っても一生死ぬことができないということが、刑罰になってますね。

太田　有名な毒ニンジンがギリシャのときあるじゃないですか。

森　あるですね。あれでソクラテスなんかもやっちゃった。

太田　だから、ちゃんと、困ってる連中は毒ニンジンを町で与えたというのもありますわ。小乗仏教は焼身自殺なんか最高の供物であり、最高の苦業としてたたえている。大乗仏教になっておかしくなる。私は、大乗仏教は仏教の堕落だという見方をしている。

森　そうすると、竜樹あたりはもういかんということになるわけだ。ハハハ。

太田　結局ね、年とって病気になったらこれチャンスと、医者にかかるな、薬は飲むなと。老人クラブで講演しましたよ。

ングは〝未承認〟の日かげの道を歩きつづけてきた（三〇年に発令された内務省令『有害避妊器具取締規則』にひっかかった）。そしていまようやく日の目をみた。その喜び？――いやとんでもない。ようやく今になって承認した政府のノロマさ加減を、七十四歳、白髪まじりのこの発明者は怒りもあらわに糾弾するのだ。『政府の時代おくれにはあきれるね。まったく。国民に謝罪すべきですよ。今まで有害だと決めつけてきた。おかげで特許もとれなかった。当然損害賠償の訴訟の対象になりますよ。それにもましてバースコントロールに失敗して人工流産した女性に対して、どう責任とるんです？』」

「（同時に純粋なる医学研究の）学位論文のほうも、文部省で〝留保〟された。理由は――『ぼくがアカだと思われたらしいのです。まだ思想問題で刑を受けてはいなかった。それなのに、〝チョット待った〟なんです。そんなバカな、とにかく思想と科学的データは別のものだ、何の関係もないじゃないか、といったんで

森　喜んだですか、みんな。

太田　「年がいったいいくつだ」というから、「だいたい六十になったら、もう間に合わせんよ」「それはちょっと殺生だから、もうちょっと値上げせい」「六十五か」「もうちょっとだ」「七十」大半賛成。

森　ウーン、ウフフフ……。こういう大胆不敵な説は初めて聞きます。もう二時間たったらだめですよ、とか、三時間たったらだめですというような病人がいますわね。まわりは見るに耐えないですわね。

太田　だから、そういうときはね、うつらうつらさせるように注射せい、というんだよ。

森　うーん、それはやっぱりなんとかして生かそうと思って、それを美徳と……。

太田　それは商売だもの、一日生かしときゃ、何万円かになるわな。そういう商売に結びついとることがいかんと。

森　そこで太田さんは、損してる。金銭的には、安楽死させてあげれば、これは儲からんでしょう。そうすると、いまもあんまり金ないじゃないですか。

太田　いやあ、かつては相当の金持だった。いまやスッカラカンになった。気が楽でいいですよ、これは。遺産相続なんにもないもの。それでね「食えんようになったら、おまえどないする」というから、「食えんようになったら、食わずに死ぬ」というね。必ず死ぬに決まっとるんだから、それは覚悟はしてるよ。いよいよこれ以上貧乏したら、食わんぞと。

　で、〔前に言った〕ぼくは死なんというのはどういうことかというと、死んだという証拠がなければいいんでしょう。辻政信が死んでるか死んでないのかわからん。蒸発をせいというんだ、ぼくは、年とったら。

すが通らなかった。ところが終戦後すぐ、こちらが頼みもしないのに、学位をポロッとくれたんです」

コミュニズムへの接近。ただしキリスト教的ヒューマニズムの方角からの……いわゆるシンパ。『ぼくはコミュニズムのモラルにどうしても同調できなかったんですよ。コミュニストはいわゆるブルジョア道徳を否定するでしょ。が、プロレタリアートだろうとブルジョアジーだろうと人間のモラルは共通のものだ、とぼくは考えていましたから……』

が、軍旗はためく世の中では、党員もシンパも十把ひとからげだ。戦争が近づく。執筆禁止処分を受ける。「そしてついに逮捕。共産党のシンパとしてだ。大阪、堺刑務所で足かけ四年の獄中生活。終戦、その年の九月に出獄。

政治の季節が始まる。共産党への入党。一九四六年京都で衆院選立候補。次点で落選。すぐに脱党。

当時の新聞のインタビュー記事の中で、その理由をこんなふうに語っている。『上から押しつけてくる官僚的

森　非常に偉い坊さんは、みんな行方知れずになる……。

太田　ネコは絶対に死ぬところを見せない。人間ももっと知恵を働かせいと。野生動物はみんなそうです。犬なんかは人間に飼われたからだめだけどね。

森　己の欲するところに行って死ぬと。老子なんかが山海関を越えたというのは、もう死んじゃったんだな。

太田　そうですよ。だから、山海関越えたほうがいいんですよ。（笑）それがいちばんいいのはね、外国行くことです。外国に行って、未開民族の世の中に入って、金があったら、食わすけんね。金がなかったらもう食わしてくれんがな。必ず死ぬんだから、パスポート捨てちゃえば、どこの人間かだれもわからん。

森　それはいいなあ。

太田　昔はね、業病というものはお遍路に出たんですよ。お遍路へ出るということは、野垂れ死にするということなんですよ。

森　行路病者。

太田　四国まわって。みんなそうですがな。往来手形というものを持ってるんだ。金が入ってるんですよ。で、もしも病気で死んだらば、御地の風習に従って埋葬してやってください。埋葬料は最低これだけ入ってる。これが昔のお遍路のしきたりですよ。

森　じゃ、太田さんもそれぐらいの金は持っとるわけだ。

太田　そうです。（笑）六文銭ぐらいはある。そうしたら、外国行くには金がいるじゃないかというからね。で、ぼくは日本に姥捨山（うばすて）みたいのつくってくれというとるんだ。ここから先に入った老人がいたら、捜しちゃいかんと。

な機構。生産的な運動を重視せず、強引に革命にもっていこうとする跳ねあがりに、どうしても賛成できなかった……』

いまでも太田博士は、自分は間違っていなかった、とキッパリ言い切る。『ぼくは戦後における脱党第一号だった。……出世したいために、党を支持したんじゃないんですからね。いまの日本共産党は政党じゃない。あれは、新興宗教ですよ』」

（西山正「避妊リングから安楽死まで」サンデー毎日一九七四・九・八）

森　沈域ですね。タブーの地をつくっちゃうんだ。

太田　そうそう。アジールという、駆込み寺みたいなもの。フランス語でアジールになる。英語ならアザイアム。これは、そこへ入ったらもう捜しに行かん。こういうとこつくってくれや。まだ日本だって、その程度の土地はありますよ。

（「サンデー毎日」一九七六年三月七日号）

「富士正晴　――はなはだ、まことに結構」　富士正晴

自動車が日本における現代の諸悪の根源であると考えてきた。

だが、待てよ、と考えはじめた。それよりも人口の多さが諸悪の根源ではあるまいか。

人口多ければこそ、屎尿多く、屎尿多ければこそ、汲み取りであろうと、水洗であろうと、汲み取った屎尿をたとえ谷間に捨てようと、池を買いとって捨てようと、雨がザンザと降れば、重力の法則に従って、低きにつき、最も低い海に落ちつく、水洗の屎尿の行く末また然り。京都の屎尿は淀川に流れこみ、下流の都市は、旧都の屎尿を薄めてうやうやしく炊事洗濯をし、またその流し水を流し、それが淀川に入り、流れ流れて、最も低い大阪湾に流れこむ。

だがしかし、人口が少なければ、流れ流れても、なかなか大阪湾へはとどかず、ほぼ清らかな水が入っていく。

人口が少なければまた、チリアクタのたぐいも少なく、人口少なければ空き地も多く、チリアクタを身近に処理できて、ゴンアイ処理場をたてたい、たてさせぬのさわぎもなく、

●富士正晴（ふじ・まさはる　一九一三〜八七）
詩人・小説家。徳島県三好郡山城谷村に生まれる。一九三一年四月、三高理科甲類に入学。詩の原稿を持って当時奈良市にいた志賀直哉を訪問し、サンボリスムの詩人竹内勝太郎への紹介状をもらう。以後、竹内に師事する。理科甲類を退学し、文科丙類に入学したが、これも中途退学する。その後工事事務所、大阪府庁、出版社などに勤める。
一九四四年三月、中国大陸に出征。復員後の四七年、島尾敏雄らと「VIKING」を創刊する。
代表作に『贋・久坂葉子伝』がある。一九六八年、第二三回毎日出版文化賞受賞。

蛔うなる夢の島にも夢はあり新聞づつみの札束さがさんなどという夢も、夢の島もろとも日本国に存在せぬことになる。

人口少なければ新聞も部数すくなく、雑誌単行本また少なく、役所少なく、役人少なく、多量の書類はいらず、つまり、ヘドロなどおそるに足らず、わずかに工場のすぐそばにヘドロへドロと漂うぐらいのことだ。

人口少なければ、白色レグフォンの巣のごとき、高層アパート、マンションもいらず。

何より人口少なければ、自動車多くはいらず、交通マヒも、光化学スモッグも心配いらない。

となれば、やはり諸悪の根源は人口の多いことであって、コインロッカーも、若い女殺しの狂乱（これはおそらく、人間を産むことのできるメスを殺すことこそ神の意に添うという宗教的行為であったのではあるまいか）、コインロッカー、赤子捨て、赤子ごろしも、メスのできる最高の神意に添う道であり、彼女らこそ聖女であるやもしれない。

そう考えてくれば、日本列島改造論などまことに迂遠、人口減少論にくらべればまことに逆を行くもの、根源的思想がそこにはないわなあと、つい思いそうなところだ。ところが、そう思って、時の結構な政府の体制に反逆する思想を持つことも、そろそろやめようかと思っている。田中内閣結構、佐藤内閣結構、その前の池田内閣、なお結構。というのはそれらの内閣は実に平和的に、まったく自然に、わたしの人口減少政策に、実にひそかに、実に逆説的に寄与してきているものであることが、今やハタと判った。

それからわたしは体制なるもののやることに、こちら側も逆説的賛意を胸に秘めているのだが、あまり大っぴらには言わぬことにし、ひそかに胸中に笑顔をうかべ、外面は憂い

（「中国戦線での」）この二年間の大行軍大転戦はたしかに体験というのに値する。わたしの体質も変わったし、私の気質も変わった。華中、華南の風物と、人間と兵卒としての生活とが、わたしには大いに影響した。

それまであまり知ることがなかったいろいろな種類の日本人を、戦争というものの中、軍隊というものの中で見、徴用苦力（クーリー）として連れてこられた中国の農民との接触の中で、中国人というものを感じることができた。

結局、中国の農民は好きになったが、日本の兵隊は例外はなくもないが、イヤな奴が大分おると感じた。憎むべき奴も相当おった。

その中で三十すぎての初年兵のチビであるわたしは、相当苦しめられもしつつ、心の奥底では割合平気であった。自分では気のつかぬうちに、わたしの体も心も神経質から、わたしの新造語だが、鈍経質みたいなものにと、鍛え直されていたようだ。

……地面の広大なところへいったおかげで、自分というものも少々は広